

## 隠退記念旅行記（1） 緑滴る瑞穂の国

かねてより夫が予定していた「隠退記念旅行」を6月に実行しました。私は張り切ってカメラ・ウーマンとしてお供したのに、最後の最後にカメラをどこかへ落として紛失してしまいました。その無念さのために、旅行記を綴るのを諦めたのですが、エルミタージュのあるじは、私が旅行について書くだらうからと思って、自分は遠慮して簡単にまとめたから、書きなさいと言うのです。それで、思い出をたよりに、また映像は人様のものをお借りして、私も記録することにしました。

このたびの「隠退記念旅行」は、彼の故郷、彼の友人、彼の母教会、彼の恩師、彼のかつての任地への旅行でしたから、夫が思うように、願うように、計画を立ててほしかったのです。ところが、彼は一向に旅行の準備、切符の手配、現地の方々との日程の調整などしないのです。彼のコンセプトは「自由、気まま」、必要な場合は「前日、準備、連絡」ということでした。それで、そのようにならざるを得ませんでした。

6月3日朝に、新幹線に乗り込みました。あっという間にトンネルの連続になり、日本は山国だとつくづく思い知らされました。けれども、トンネルをくぐり抜けるたびに、車窓から目にする風景は、「緑滴る瑞穂の国」そのものでした。田植えシーズンでした。日本国中「水浸し」になっているという光景でした。山が真近かに迫っていて、わずかな平地しかないのに、棚田にしてまでも、田んぼを作っているのです。厳しい手仕事で大切に守られてきた田んぼが、どこまでも続き、絵のように美しく、見事でした。水を張って、早苗の準備をしている中を、新幹線は進んでいきました。新鮮そのものの新緑の山々の木々、家々の近く、田畑の近くに植えられている樹木の緑、それらが田の水や、湿気を伴った空気と相まって、柔らかで穏やかな自然、丁寧に守られてきた自然を感じさせるのです。すべての風景が一幅の絵のようで、喉の渇きを癒すような優しさだと思いました。



あとで、夫の友人が嘆きながら言うのです。耕作放棄地になったところで竹の処置ができず、竹が凌駕してきている。自然が壊されてきていると。よく眺めると、裾野から柔らかい竹が群生し、山を駆け上り、古い竹が腐って、倒木が次々と起こり、針葉樹が枯れているところが目につきました。農業、林業などの自然と向き合う厳しい仕事には後継者が少なくなっているのだと、この目で実感させられました。